

皆さん、おはようございます。早いもので新年度が始まり、約1か月、5月になりました。学校を囲む山々の新緑も美しく、一年で最もさわやかさを感じる季節です。1年生の皆さんも、ようやく学校に慣れ、少しの厳しさを感じながらも、仲間と共に楽しく、希望を持って登校するようになってきたことと思います。

しかし、今、新型コロナウイルスの感染が再び深刻な状況になり、変異株などという新たな不安要素も出てきました。授業を始め、様々な学校行事、部活動などが制限、縮小、中止などが続いています。何とか工夫し、やれることをやる、こういう状況だからこそやれることもあるというプラスの感情で学校生活を送ってほしいと思います。

さて、まず最初に、この新聞記事を見てください。相撲取りの照ノ富士が大関に返り咲いたという記事です。以前私が話したことを2、3年生は覚えていると思います。1年生もいるので復習しますが、慢心から生活面の不摂生がたたったり、大きな病気にかかった上、前十字靭帯断裂という大怪我を負ってしまい、大関から序二段にまで落ちてしまったのです。それは、付き人がいて、月給250万円の生活から給料なしになってしまったということなのです。当然、もう体力的にも精神的にも続けられないでしょう。そのため引退を親方に申し出ました。それも何度も。しかし、本校に訪れたことがあり、本館の1階に色紙がありますが、親方、伊勢ヶ浜親方にその度に説得され、心を改め、練習も基礎から徹底的にやり直しました。そして、奇跡の復活、優勝までしました。ここまでを前年度に話をしたのですが、その後も物語は続いていました。とうとう大関に復帰したのです。人はあきらめてはいけない、どん底に落ちても気力、努力で立ち直ることはできるということを教えてくださいました。これが1年生の皆さんにも話した「レジリエンス」、困難にぶつかり、落ち込んでも、回復する力というものなのです。これも大きな一つの例です。

その「レジリエンス」と共に最近よく取り上げられる言葉ですが、「グリット」という言葉があります。ペンシルバニア大学のダックワース教授は、一連の研究で「学業、スポーツ、芸術、ビジネスなど様々な分野で成功している人たちの成功の要因は生まれ持った才能や知能ではなく、後天的に誰もが獲得可能なグリットにある」と言っています。「グリット」は「やり抜く力」と一般的には訳されています。そして、その「グリット」は情熱と粘り強さの2つの要素によって定義されるのです。

そこで、私の話になります。特にはっきりとした目標があったわけではない時期のことですが、少なくとも何かを粘り強く、夢中になってやるという原点がありました。この「世界旅行記」と題した2冊の冊子です。6年2組とあるように小学生の時に書いたものです。もちろん世界一周したわけではなく、本、主に雑誌などを参考にしながら世界を旅行したつもりになって一人称で書きました。両方で原稿用紙305枚あります。執筆期間は、12月27日から3月14日、1日に4枚くらい書いていた計算になります。後になって、本当によく書いたものだと思えます。もちろん、

一気にこういうことが苦もなく、楽しんでできるようになった訳ではありません。ここに至るにはきちんとした段階があったのです。

5年生、6年生と平野英子先生という先生が担任だったのですが、5年生の時に、日光の遠足の作文を冊子にしてくれて、これが11枚だったのです。これが始まりでした。そして、「世界旅行記」の前と言ったら、やはり「日本旅行記」です。これがまず先にあったのです。内容は「世界旅行記」と同じです。自分が想像で日本中を旅するといったものです。記録では3月25日から4月13日までで89枚、20日間で書き上げました。そして、その間に鎌倉方面への修学旅行記が入ります。これが62枚。ですから1年間で合計456枚書いているのです。それ以外にも平野先生は、生徒たちに行事のたびに感想文を書かせていましたから、書いた作文用紙の枚数は、軽く500枚は超えていたと思います。もちろん作文ばかりやっていたわけではなく、宿題もたくさん出ましたり、学習でも鍛えられていました。このことが、それ以降、何をするにしてもこつこつ地道に物事に取り組む姿勢の土台になっており、あの時あれだけのことができたという自信にもなっています。

ただし、忘れてならないのは、枚数の多い少ないの差はあっても、クラス全員が取り組んでいたことです。皆、頑張っている、時々はどれだけ書いたか枚数を言い合ったり、内容を見せ合ったりと、クラスが一つになって取り組んでいる一体感がとても好きで、楽しく学校生活を過ごしていました。そして、その平野先生は、叱る時は叱りますが、よく一人ひとりのことをよく見ていてくれて、いつも誰かの良いことを見つけてはとても褒めてくれ、何よりも毎日昼休み、私たちと一緒にドッジボールをするなど常に生徒に寄り添ってくれた先生なのです。ですから、作文を面倒くさがってやらない生徒が一人もいませんでした。そうしたことが、私のやる気を後押ししてくれたことも確かです。

ところで、皆さんの様子を見てみると、難しい状況下にあっても、早朝、放課後、決まった時間に決まった場所で黙々と学習している姿、教育センターでも閉館まで学習していく姿、放課後、ほぼ毎日先生に質問をする姿、部活動でも寮の前を通るとバットを必死に振っている姿、朝、グラウンドを走っている姿をよく見かけます。こうした姿勢こそ「グリット」の始まりなのです。

皆さんの中には、どうして自分は才能がないのか、力がないなどと悲観している人はいないでしょうか。まずは、あきらめることなく、嘆くことなく、目標に向かって情熱と粘り強さを持って向かっていくことです。すでにその種を持った人たちがいるわけですから、そうした人たちをよく見て、習うことから始めたらどうでしょうか。もちろん人によって結果の出方や早さが違うかもしれませんが、しかし、そうした姿勢を持つこと自体が大きな才能となるのです。今すぐではなくとも、必ずいつか実を結ぶことを信じて取り組んでほしいのです。毎回小テストを合格するとか、必ず電車の中では英単語を暗記するとか、何か一つでも自分は、毎日続けてこれだけは頑張っているというものを作ることから始めてみて下さい。

では、感染に気をつけながら、充実した連休を過ごしてください。